

2 ベトナム企業視察調査を終えて

水川 侑(所長)

社研主催に依る海外企業視察旅行は、今回で3回目である。第1回目の韓国、第2回目の中国、そして今回の越南。なぜ、ベトナムに決定されたか。その理由は、私には詳しくはわからない。なぜならば、前所長の泉武夫氏の時に決定され、それを突然引継ぐことになったからである。推測するところ、ベトナム共産党がドイモイ政策を採用したことにより、近年、ベトナム経済は著しく成長している、また、日本からの投資もそれなりに行なわれているようである。このような状況の下で、経営者はどのような考えに基づいて企業の経営を行っているのだろうか、また、労働者はどのような環境の下でどのように働いているのだろうか、等々、いろいろな事柄について、現場で教えていただき、また、現場を見学させていただくことによって、ベトナム経済の発展の現況を理解することができるのではないか。このような考えの下に、ベトナム行きが決定されたのではないかと考えている。

とにかく、私自身は、ベトナム企業視察の理由を、ドイモイ政策が採択されて以降、この政策がねばり強く持続的に実施されたことで、経済的発展の面で、かなりの成果をあげているといわれている現況を、まずは視察してみたい——百聞は一見に如かず——ということにした。

次なる問題は、訪問させていただく機関や企業に、どのような問題意識をもって視察をお願いするのか、ということであった。その具体的な内容を提示しなければ、ベトナムに何をしに来たのかと問われかねないので、訪問機関と企業に対して、質問状を作成して提出することにした(先方からの要請もあった)。

質問状作成にあたっては、2月3日に開催した「公開研究会」の席で、参加者に質問事項を提出して下さるようお願いしていたので、その内、質問事項がよせられると期待していた。ところが、日時は経過して行くが、質問事項はよせられない。自主的な提出を待っているだけでは空振りになりそうな気配を感じたので、加藤幸三郎氏、福島義和氏、大西勝明氏に特にお願いして、幾つかの質問事項を考えていただいた。三氏と私の質問事項を基にして、事務局長に「訪問先質問状一覧」(75頁参照)を最終的に作成していただいた。三氏の御協力に対し、この紙面を借りてお礼を申し上げます。

次に、訪問先で、どのような内容の挨拶をするか、これが私にとって一番の頭痛の種であった。そして、出発の日が近づくにつれて憂うつになっていった。麻島元所長は、韓国及び中国訪問の時、それぞれ、韓国語及び中国語で挨拶されることに相当エネルギーを浪やされたようです。私は、ベトナム語で挨拶しようなどとは全く考えてもみなく、それよりも挨拶の内容を

どのようなものにするか、その方が気掛りであった。そして、訪問先での会議の進行状況を次のように想定して、挨拶の内容を考えることにした。まず初めに、先方が挨拶され、次に団長（あるいは副団長）が挨拶することになる。この時に、訪問させていただいた目的を——質問事項が事前に先方に届いているはずであるから、その質問事項を念頭に置いて——大雑把に述べればよいであろう。その後、先方が質問事項について説明して下さる。それが終わると、団員の方々から、次々と質問が飛び出してくる。

現実には、想定通りには進行しなかった。先方が説明して下さっているのを聞きながら、挨拶の中身を考え直さなければならない状況におかれた。場慣れしておられる人なら、なんの苦も無く、すらすらと挨拶の言葉が出てくるのですが、私にはそうはゆかなかった。団長は今回限りで十分であると、これが旅行の感想である。

次に、初めてのベトナム訪問で感じた印象を若干書かせていただきます。ベトナムは第二次インドシナ戦争で米軍と闘って勝利し、米軍を海の彼方に追放したのであるが、米ドルを追放することはできなかったようだ。米ドル、現在ベトナムの金（正貨）の如く使用され、自国のドン（釣銭）としての役割しか果たしていないようだ（二重通貨制）。自国の通貨より他国の通貨が選好されて、それを貯える（銀行に預金するより筆筒預金の方が多い）といわれる状況の下で、ベトナム経済は将来的に持続的に発展するのであろうか。自国通貨に対する信用が低く、投資に必要な資金調達（あるいは資金循環）のシステムが十分に機能していないような現状の下で、年率8-9%の経済成長を持続させて行くことができるのであろうか（外国からの投資が相当期待されているが、それを除いて考えた場合）。

訪問した都市の市場や商店には商品が豊かに並んでいたが、市場経済を発展させるためには、全国的な規模での市場を形成することが必要であろう。そのためには、都市と農村、都市と都市、地域と地域の間を結ぶ交通通信網の整備が急務であろう。インフラはかなり劣悪であると感じた。

経済発展の途についたばかりの国に——農作業の状況から、昭和30年前後の私の田舎の状況に似ていると感じた——、多くのものを求めることは酷だと思いが、ベトナムがこれから先、大きく発展する可能性がないわけではない。国民が新しい知識や技術を身に付けようと、勉学に勤んでいるからである（工場の終業時間は4時頃。その後、各種の学校に通学するそうである）。若者が新しい知識や技術を吸収し、蓄積してゆけば、ベトナムの経済社会も将来的には大きく発展してゆくことであろう。

今回の視察旅行の企画を進めるに当たっては、三輪元所長の友人である三進交易株式会社社長田中萬雄氏に全面的にお世話になりました。訪問先との煩わしい交渉は田中氏が全てやって下さって、「日程概要」（76頁参照）に記している機関・企業を訪問させていただくことができま

した。田中氏のベトナム政府機関、共産党及び企業の方々との間に築かれた厚い信頼関係のお蔭で、今回の視察調査を成功裏に終えることができました。改めて、この紙面を借りて、田中社長に心からお礼を申し上げます。

また、今回の有益な視察旅行が大きなトラブルもなく無事に終えることができましたのは、三進交易の田中萬雄氏と新妻東一氏、ユーラスツアーズ添乗員の坂田恒衛氏、訪問先の機関・企業の関係者、全ての方々のご協力下さったお蔭でございます。心から感謝のお礼を申し上げます。最後に、今回の旅行を企画・実施するに際しての不十分な点につきましてはお許しただくとして、参加された諸先生方のご協力に感謝致します。



〈編集後記〉

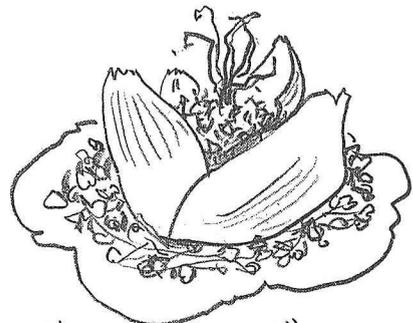
ベトナム視察から3ヶ月が経った。月日の過ぎるのは良くも悪くも早い。ベトナム視察にはさまざまな問題関心を持つ所員が参加された。質疑応答の時間が少なくまた現在のベトナムの政治と経済に関する情報が少ないので、折角のチャンスを残念に思われた方も多であろう。一国の政治と経済を生々の姿で見るにも不十分な時間であり、かつそれを正確に理解し、報告することはでき難い。このような制約の中で執筆された所員の方々に厚くお礼申し上げます。

同行した一員として、この月報を読ませて頂くと各所員の問題関心が良くわかり、おなじ体験でも種々に洞察が加えられていて興味深く読めました。

私の希望ですが、こうした企画を今後も更に発展させ、月報だけでなく「年報」にも執筆できるものにして欲しいと思います。

この月報で随所に描かれている挿し絵は三輪芳郎元所長の奥様の手になるものです。大変見事に描かれて、私共の心をもう一度ベトナムへ連れていってくれるような思いです。作品の提供にお礼申し上げます。

実はこの編集後記、イギリスで書いています。事務局長から「段取りを設定したのだから」「良き記念になるから」と言われて書いております。E-mailで日本語のフォントが使用できたら、もっと速くて、安くすむのですが、残念です。いつれ実現されるでしょう。（S. K）



バナナ・フラワー・サラダ

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (244)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 水川 侑

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
